

出口の見えない状況にある時こそ、 明るい未来をめざしギアを切り替える必要があります。

環境市場や自動車のEV化などによる
変革をチャンスと捉え、
一人ひとりの生産性を高めるための
準備を進めています。

この1年の世界経済は、新型コロナウイルス感染症の影響の陰に隠れ、エネルギー資源をはじめさまざまな物の価格上昇に伴うインフレが進みつつあります。さらには、ウクライナ問題が追い打ちとなり、ますます先が見えない状況になってきました。

こうした状況に加え米国の金利政策の見直しが、為替にも悪影響を及ぼしドル高や「悪い円安」を招き、新興国の通貨危機への警戒も必要になります。インフレは日本でも進みつつあり、すでに実質2~3%上昇しており、今後さらに進む懸念もあるとの危機意識を持つべきです。

こうした出口の見えない状況は人の気持ちを暗くしますが、私はそれを憂うばかりでなく、悪い状況を乗り切る覚悟を持ち、その準備を進めるべきと考えます。私たちはこれまで何度も原料高や通貨危機を経験し、それを乗り越えてきました。今の産業界は、環境製品への対応や自動車のEV化などにより、変革の時期にあります。明るい未来をめざすには、こうした変革をチャンスと捉え、ギアを切り替え、視野を広げ一人ひとりの生産性をあげることがとても重要だと思います。

社員一人ひとりの視野を広げ
生産性を高めるために、全社的な
デジタル化を推進しています。

日本は高齢化が進み、若い世代の労働人口が減ってきています。その中で生産性を高めていくには、デジタル技術が有効な手段の一つとなります。そうした考えから当社では、2018年より進めているヤスハラケミカル流の「働き方改革」の一環として、デジタル化を推進する「ITグランドデザイン計画^(※1)」に取り組んでいます。

私の考えるデジタル化とは、PCを使って仕事をするものではありません。これまで事務所でやってきた仕事はデジタル技術をうまく使えば、自宅やリモートでも同じ仕事ができます。そうすれば作業時間と移動時間を今より削減でき、その時間を使って別の仕事をするできるようになります。それこそが、私の思うデジタル化です。

ニュースや新聞、仕事先や同僚とのなげない雑談の中にも「仕事のタネ」が潜んでいます。そのタネに気づくことが大切で、気づくには、日頃から情報を一方から見ただけでなく、俯瞰的にみる習慣を身につけておく必要があります。私がデジタル化を進める目的は、「仕事のタネ」を見逃さないよう、社員一人ひとりが日頃から視野を広げ深掘りする時間を創り成長することで、会社全体の生産性を高めることです。

(※1)詳細はP9、特集1【ITグランドデザイン計画】をご参照ください。

鶴飼工場ではデジタルデータを
共有化することで、
さまざまな製造データの「見える化」に
取り組んでいます。

同じように、生産設備でのデジタル化も重要です。そこで鶴飼工場では、昨年からのデータの「見える化」を目的にしたデジタル化に取り組んでいます。^(※2)

これまで鶴飼工場では、製造に関するさまざまな数値を紙で記録してきましたが、今ではそれをデジタルデータ入力に置き換えています。そうすることで製造記録のソートや検索を容易にし、これまで見えにくかった中長期的な傾向や推移などを、簡単に確認することが可能になりました。

この取り組みは、現場作業員の負荷やミスを低減させるだけでなく、その分析結果を製造計画にいかして、生産効率や品質を向上させ、さらには従業員の所得向上など、さまざまな成果に結びつくと考えています。

当社の工場では各工場毎に製品や製造工程が異なるため、鶴飼工場での取り組みをそのまま横展開することはできません。生産設備でのデジタル化は、各工場での成果

を共有化しながら、各工場の特性に応じて展開していく予定です。

(※2) 詳細はP11、特集2【鶴飼工場DX導入による「見える化」推進】をご参照ください。

隠れた真実を見極める視点と、
自ら考え行動する力を持った人財を
育てていきます。

近年のいろいろな指標をみると、世界の中で日本のチカラが落ちていることがわかりますが、国内のテレビや新聞報道などでそのことを伝えて警鐘を鳴らすことはほとんどありません。今の社会はとて複雑で、真実が見えにくくなっています。

裏に隠れているものを見極めていくために、私は社員に普段から情報に対して敏感になり、仮説をたてながら自分で考え深掘りしていくことを要求しています。社内では、それを「補助線を引く」というキーワードを使っていますが、雑多の情報の中に隠れて見えなかった「仕事のタネ」も、補助線を引くことで、いち早く気づき、課題解決のための筋道を考え提案することが可能になります。

この2年間のデジタル化への取り組みで、自由に使える時間が増えました。私は社員に、その時間を日頃から気になることや気づいたことの原因や対応策を、自分なりに調べ考える時間に使うように伝えていきます。そして一人ひとりが補助線を引き、それをもとに考えるようになれば、全体を俯瞰する視点や自ら考え行動する決断力がさらに育っていくと思います。私は、そんな人財を一人でも多く育てていくことで、明るい未来を拓いていきたいと考えています。

ヤスハラケミカル株式会社

代表取締役社長 安原 禎 二

Teiji Yasuhara

